

南九州におけるイチゴ（はるのか）の促成栽培に関する研究

第2報 高冷地育苗における子苗確保と山下し時の植え傷み防止について

西本 太・河北二人・*中鶴 功

(熊本農試八代支場・*球磨農研)

前報において標高1000mの高冷地における育苗法と促成効果について報告し、育苗産地育成を目標に試験を実施してきたが、本報ではさらに高冷地における一貫育苗体系を確立するために子苗確保の問題、高冷地苗の山下しの際の植え傷み防止対策等について試験を行い、三の知見を得たのでその概要について報告する。

1. 子苗の確保について

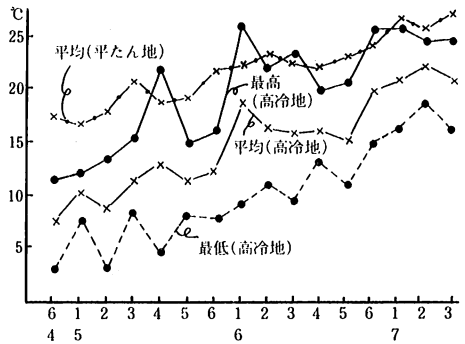
高冷地育苗では平たん地に比べ低温のためにランナーの発生時期が遅れ、また、発生数も少ない。苗の生産のみを主体とする高冷地育苗産地においては平たん地からの苗の需要が増加するにいたるが子苗の確保が問題となってきた。そこで高冷地では6月末までに発生したランナーを当年苗として利用するとともに、さらに7月以降発生したランナーを9月上旬から9月下旬にかけて採苗し、越冬させ翌年の子苗として利用する（以下越冬苗という）方法について検討した。

昭和52年度は苗の種類として、越冬苗、高冷地当年苗、山上げ苗、平たん地苗を供試し、8月5日に仮植、9月22日山下し（定植）を行い、苗の種類と収量の関係を検討した。収穫開始日は高冷地育苗が平たん地育苗に比較し20日程度早く、1月末までの前期収量でも高冷地育苗が多収を示した。苗の種類では越冬苗、高冷地当年苗、山上げ苗の間では、収穫開始日は差がなく、前期収量では山上げ苗がやや多かったものの越冬苗と当年苗では大差がなかった。また、収穫全期間を通じた収量でも差はなかった。

昭和53年度も同様に越冬苗、高冷地当年苗、平たん地苗を供試し、8月7日に仮植を行い、9月20日に山下し（定植）で試験を行った。

花芽分化期は平たん地育苗に対し高冷地育苗が8日程早くなり、越冬苗と当年苗では差がなかった。分化時の葉数は平たん地苗が大きく、クラウン茎は越冬苗が最も大であった。開花始め、収穫始めは高冷地育苗が早くなり、苗の種類では差がなかった。前期収量は越冬苗が最も多収を示し、次いで高冷地当年苗であり、平たん地苗はやや少なかった。全期間の収量は育苗地、苗の種類間の差は認められなかった。

以上の結果から越冬苗の利用は当年苗と比較し、生育、



第1図 ランナー発生期における温度推移

年度	苗の種類	収穫始	前期 (1月31日)	後期 (4月30日)
昭和52年	越冬苗	11月16日	■	▬
	高冷地当年苗	11月15日	■	▬
	山上げ苗	11月16日	■	▬
	平たん地育苗	12月7日	■	▬
昭和53年	越冬苗	11月7日	■	▬
	高冷地当年苗	11月7日	■	▬
	平たん地育苗	12月8日	■	▬

g 100 100 200 300 g

第2図 苗の種類と収量（良果株当たり）

育苗地・鉢の種類	収穫始	前期 (1月31日)	後期 (4月30日)
高冷地・ポリ鉢	12月8日	■	▬
ジィフィポット	11月15日	■	▬
ク・慣行	11月29日	■	▬
平たん地・ポリ鉢	12月8日	■	▬
ジィフィポット	12月8日	■	▬
ク・慣行	12月20日	■	▬

g 100 100 200 300g

第3図 鉢の種類と収量(昭51)

※ {ポリ鉢φ15cm
ジィフィポットφ9cm

収量ともに大差がなく、当年苗と同様に利用できることが明らかになった。高冷地育苗産地にあっては当年苗と越冬苗をあわせて利用することにより苗生産の増大が図られるものと思われる。

2. 山下し時の植え傷み防止について

高冷地において育苗された苗を山下しする際、輸送途上の根鉢のくずれ、あるいは平たん地での定植期の高温、乾燥等から高冷地苗は特に植え傷みが生じやすく、それが原因として初期生育の遅れ、収量の低下等が報告されている。そこで高冷地苗の植え傷み防止の一方法として鉢育苗について検討した。

昭和51年度は、ジィフィポット(φ9cm), ポリ鉢(φ15cm)を用い、育苗地は高冷地と平たん地で行い、8月3日仮植、9月29日山下し(定植)として試験を行った。収穫始めは高冷地ジィフィポット育苗が最も早く、1月末までの前期収量は高冷地ジィフィポットが最も多く、高冷地の慣行育苗が少なかった。全期間を通した収量では、高冷地育苗が平たん地育苗より多収を示したが、鉢の種類、慣行育苗との比較では差がなかった。

昭和54年度は要因として育苗地、育苗法、山下し(定植)期の3とし、水準は高冷地、平たん地、育苗法は鉢育苗、慣行育苗で山下し期は9月14日、9月27日の区を設け8月7日仮植を行い、苗床施肥量は鉢当たりN120mg。慣行育苗は1a当たり1.2kgとした。

9月8日に検鏡した花芽の分化状況は高冷地鉢育苗が最も進み、次いで平たん地鉢育苗であり慣行育苗については高冷地、平たん地とも未分化の状態であった。開花については高冷地鉢育苗9月14日山下し区が最も早く、次いで高冷地鉢育苗9月27日山下し区であり、高冷地慣行育苗区は9月14日、9月27日の山下しとも開花が遅れた。収穫始めも高冷地鉢育苗9月14日山下し区が最も早

かった。

年内収量は高冷地鉢育苗9月14日山下し区が最も多収を示し、次いで9月27日山下し区であり、慣行育苗区については年内収量が少なかった。

以上の結果から鉢育苗は慣行育苗に比べ定植後の活着が早く、初期の生育、収量ともに優れ定植時の植え傷み防止に十分役立つと思われる。また、鉢育苗により花芽分化が促進される傾向にあり、慣行育苗に比較し栄養調節、水管理も行いやすいので今後このような点からも検討を行う必要がある。

第1表 花芽分化及び開花(昭54)

No.	育苗地	育苗法	山下し(定植)時期	花芽分化・ (9月8日検鏡)	開花株数				
					11/1	8	15	22	30
1	高冷地	鉢	9.14	× △ △ ○ ○	株 8	株 26	株 32	株 34	株 37
			9.27		0	11	35	37	—
2	高冷地	慣行	9.14		0	1	28	33	37
			9.27	× × × × ×	0	1	13	32	37
3	平たん地	鉢	9.14	× △ △ △	1	6	28	35	37
			9.27		0	2	29	36	37
4	平たん地	慣行	9.14		0	3	27	36	37
			9.27	× × × ×	0	5	29	35	37

第2表 良果収量(昭54)

No.	育苗地	育苗法	山下し(定植)時期	収穫始	年内収量		4月末収量		合計	
					個数	重量	個数	重量	個数	重量
1	高冷地	鉢	9.14	12. 8	67	788	596	4255	663	5043
			9.27	12.12	52	722	551	4103	603	4825
2	高冷地	慣行	9.14	12. 8	22	196	548	4018	570	4214
			9.27	12.18	15	185	544	3889	569	4074
3	平たん地	鉢	9.14	12.12	44	529	537	3693	581	4222
			9.27	12.18	30	307	548	3730	578	4037
4	平たん地	慣行	9.14	12.18	37	455	611	4632	648	5087
			9.27	12.18	48	570	648	4743	696	5313